

卷頭言

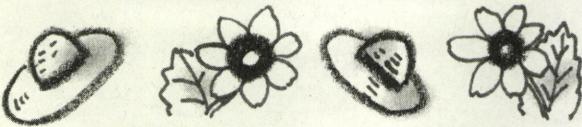
世紀転換期における

日本とロシアの保育界

村知稔三

六十五回目の八月十五日が近づいています。二〇世紀を特徴づけた総力戦である第二次世界大戦やその直後の社会の実際を知る人々も少なくなりました。他方、この日を終戦記念日として、敗戦の痛みや重みを感じながら、反省しようとしてきた私たちは、この間に、十五日が隣国では戦勝や解放の記念日として祝われていたり、同日を過ぎても戦闘行動が継続していたりしたことを知るようになりました。たとえば、私が研究の対象としている旧ソ連と日本の間では八月八日から九月五日まで戦闘が続いていました。

当事者が少なくなることで記憶の継承が難しくなると共に、その時代の歴史を客観的にとらえ、共有できるようになつてきていくともいえます。その意味でいまこそ、「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る」ことが大切です。



もう少し近い時期の保育界についても同じ格言が当てはまりそうです。そこでここでは、世紀転換期に子育てや保育をめぐる状況が大きく変化した日本とロシアについて、その経過を簡単に振り返ってみたいと思います。

ご存じのように日本では、二〇年前の一・五七ショックを契機に少子化という造語が広まり始めました。それと共に保育に対する社会的な関心が高まり、マスコミで保育のあり方が大きく報道されるのも今日では普通になっています。また幼稚園と保育所の関係も変わり、園児数では一九九八（平成10）年に初めて後者が前者を上回りました。同じ年に出た『厚生白書』が「三歳児神話に合理的な根拠は認められない」としたのは偶然でしょうか。

このような関心の高まりは、法令の改正などを通して、保育施設に多くの役割・機能を追加することでもありました。実際、保育時間はかなり延び、さまざまな保育需要に応える特別保育もいまでは「特別」ではなくなっています。

他方、そこで育つ乳幼児や、働く保育者をめぐる条件はあまり改善されていません。そのうえ、近く予定されている施設基準の緩和や保育制度の改革により、保育条件がかなり後退するのではないか、と心配されています。

こうした緩和や改革の土台にある考えが、一月号の巻頭言でも指摘されていた新自由主義です。これが現代世界を特徴づけ、格差や貧困、さらには飢餓や戦争と結びついている点は、堀尾輝久氏が述べられているとおりです。

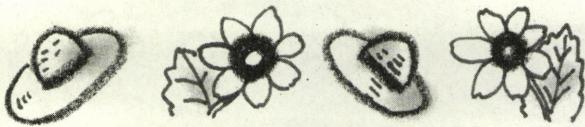
この新自由主義の拡大と一九九一年のソ連の解体とが結びついています。

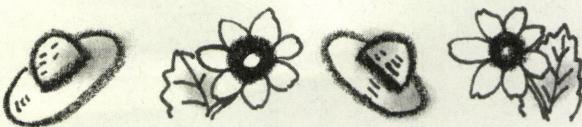
一九八〇年代中ごろに旧ソ連の指導者となつたゴルバチョフ氏が始めたペレストロイカ（再建）とグラスノスチ（情報公開）は、結果的にソ連社会の暗部を明らかにし、その再建ではなく解体をもたらしました。

それは、二〇世紀後半を特徴づけた米ソの対立（冷戦）の終わりを意味しただけでなく、ソ連やその国はとなつていた社会主義との緊張関係を、米国や資本主義が失うことにもつながりました。二〇〇一年の九・一一以降のアフガニスタン・イラクでの戦争や二〇〇八年のリーマン・ショックはその象徴です。

解体で十五の国々に分かれた旧ソ連の多くを引き継いだ現在のロシアは、そのつけを支払うため、一九九〇年代を通して混乱しました。一九九二年には物価が数十倍にもなり、路上には物乞いがあふれました。その中には子どもの姿もありました。ソ連時代の貧しいながらも均等な社会から、中間層が少なく、一部の金持ちと大半の貧困層という社会に変わったからです。一九九八年には金融危機にも遭遇しました。

こうした状況を反映して、ロシアの合計出生率は一九九〇年の一・八九から、現在では日本を下回る一・二五まで低下しています。また、日本では千分の三という乳児死亡率がロシアでは十を超えており、主要国では高い段階にあります。ただ二十一世紀に入るころから原油や天然ガスが高騰し、経済が成長軌道にのつたことから、死亡率は低下し始めています。





ソ連時代にほぼ全員が働いていた女性は、一九九〇年代に進められた市場経済化の影響で三人に一人が職を失いました。それに伴い、保育施設は九万弱から五万余りまで減少し、園児数も九百万人が半分以下になり、いまもあまり回復していません。

この時期に私がモスクワやペテルブルク（旧レニングラード）、さらに地方都市ヴァトカで訪ねた保育施設は、予算削減の影響で、施設・設備共に老朽化していました。ただ、ソ連時代には広い国土で一定の保育水準を維持し、「ソビエト人」を育成するために一元化されていた保育内容が、一九九〇年代に自由化されたことで、保育者の意欲には熱いものがありました。どの国でも保育の自由は大切なようです。

近年になりロシアの経済状況が好転すると、施設も改修され始め、新しい設備が目立つようになっています。何より、保育施設の見学に訪れた私たちに、以前はお茶くらいしか出なかつたのが、最近では立派な食事が用意され、シャンパンまでふるまわれようになりました（ちなみにロシアの正餐は昼食です）。

このようにロシアでも、知識主導社会や高度知識化社会に対応しようと、保育や教育への投資を増大しています。ひるがえつて日本の現状はどうでしょうか。

隣国であるにもかかわらず、日本とロシアの保育界の間に組織的な交流は依然として無いので、ロシア保育界の観察を、その歴史研究と共に（拙著「ロシア革命と保育の公共性—どの子にも無料の公的保育を—」九州大学出版会二〇〇七年参照）、いましばらく続ける必要がありそうです。（青山学院女子短期大学子ども学科教授）